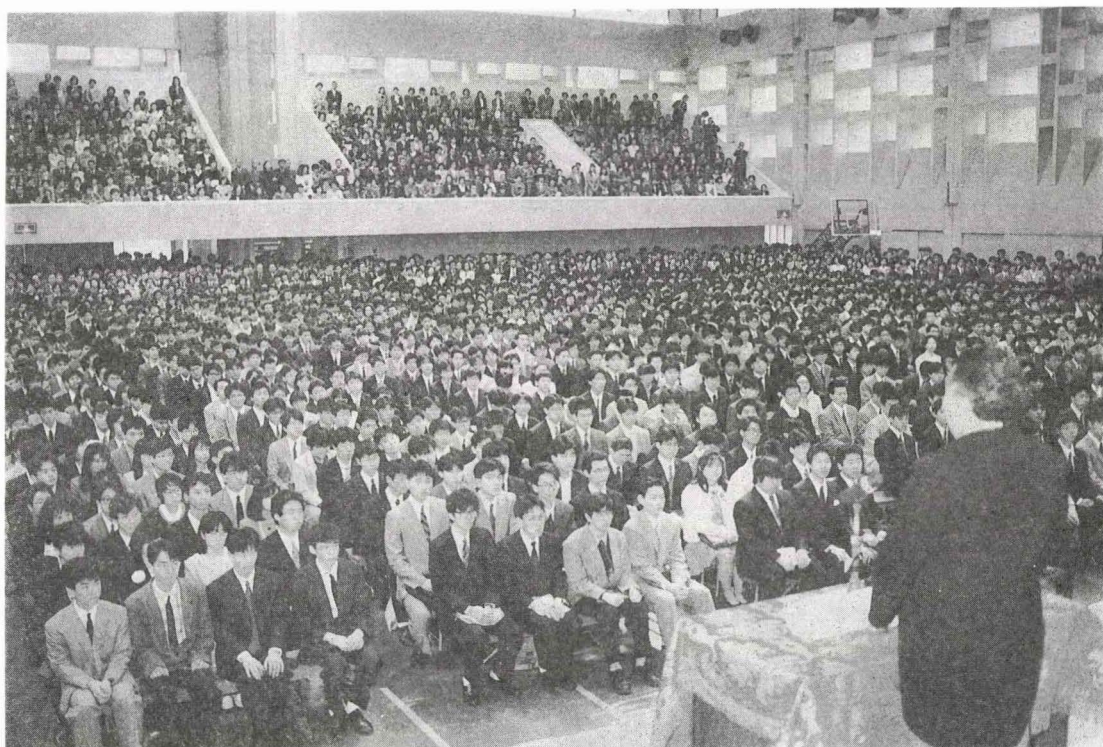


Title	京大広報 No. 350
Author(s)	
Citation	京大広報 (1988), 350: 455-468
Issue Date	1988-04-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/209329
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 350

京都大学広報委員会



昭和63年度学部入学式 ー関連記事 462 ページー

目 次

学部入学式における総長のことば

総長 西島 安則	456
名誉教授称号授与式	460
昭和63年度入学者選抜学力試験の結果	461
昭和63年度学部入学式	462
昭和63年度大学院入学式	462
昭和63年度医療技術短期大学部入学式	462
部局長の交替等	462
昭和62年度京都大学創立七十周年 記念後援会助成金交付者	463

〈紹介〉

化学研究所材料物性基礎研究部門	465
-----------------	-----

〈保健コーナー〉

夢の仕事と精神保健	466
訃 報	467
日 誌	467

〈随想〉

春のゆくえ	
名誉教授 葛西善三郎	468

学部入学式における総長のことば

昭和63年 4 月11日

総 長 西 島 安 則

入学生諸君、入学おめでとう。

本日ここに入学式を挙行するに当り、歴代総長のご来臨をいただき、また多くの名誉教授の先生方のご臨席をいただくことができました。お越しいただきました最もご高齢の名誉教授は松田長三郎先生であります。先生は、明治26年（1893）のお生まれで、74年前の大正3年（1914）に京都帝国大学の工科大学に入学され、今年95歳になられます。このように多数の来賓のご臨席をいただき、部局長の先生方、教職員の皆さんとともに、昭和63年度の入学式を行い、2,960名の入学者、そして30名の第3年次編入学者を加えますと、2,990名の潑刺とした諸君を迎えますことは、京都大学にとって最も大きな喜びであります。

諸君は京都大学で学ぶことを志し、努力を重ね研鑽を積んで、晴れてここに京都大学の学生となったのであります。諸君の一人ひとりの眼差しの輝きの中に、これから京大生として過ごす毎日への意欲を感じます。この慶びの場で、これまで諸君を育み励まして下さったご両親をはじめご家族の皆様、そして諸君が幼い時から通ったそれぞれの学校で、諸君に「如何に生きるか」と、人生の意義を語りかけ、また、「学ぶということ」を教えて下さった先生方、そして、今日まで楽しい日々を実り多いものとし、苦しい時には励まし合った諸君の親しい友人たち、さらに、陰になり日向になって諸君を今日まで支えてくれたその他の多くの人びとに、諸君とともに心からお礼を申し上げたいと思います。

昨日、4月10日、本州—四国連絡橋の児島—坂出ルートが瀬戸内海の島々を6つの橋で優雅につないで完成開通しました。昭和53年（1978）10月10日の着工から9年6か月、本格的な研究・調査の段階からですと、30年近くの歳月を経て、新しい材料、新しい工法の数々を開発しつつ、科学・技術の粋を集めて完成したのであります。これは、また、自然と人間の関係という永遠の課題に対する現代の学術総合の一つの表現と云うこともできましょう。これより先、今年の3月13日には青函トンネルが開業し、津軽海峡の海底深く、長さ53.8kmのトンネルを列車が通りました。これは、昭和39年（1964）5月に調査斜坑の掘削に着手して以来、異常出水など度重なる障害を克服して、24年間の歳月を経て完成したものです。昭和11年（1936）に着工し、昭和17年（1942）6月に最初のトンネルが完成した関門トンネルとともに、これで日本列島の北海道、本州、四国、九州の4つの島が陸路で結ばれ、道路と鉄道のネットワークで結合された意義は大きく、記念すべき春といえ

ましよう。

本州—四国連絡橋の開通が、20世紀の一つのモニュメントとしますと、丁度100年前の春には、19世紀の大事業がその完成に近づいていたのです。それは、琵琶湖疏水であります。児島—坂出ルートが海を越えて橋で結び陸路を通じたのに対して、琵琶湖疏水の当初の計画は、琵琶湖から京都までトンネルと運河によって水路を開き、水を導くことでした。

ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794~1858) の率いる、2隻の外輪型蒸気船と2隻の帆船からなる、アメリカ艦隊がアメリカ東部から出港し、大西洋を越え、アフリカの南端の喜望峰を回り、インド洋を横切って、ついに浦賀沖に現れたのは嘉永6年(1853)の初夏のことでした。こうした開国を迫る諸国の外圧が約200年にわたり鎖国政策をとってきた徳川幕府の基を揺るがしました。時代の動きは急でした、この「黒船来航」から僅か14年で明治維新となったのです。京都の町は、静的な伝統文化の中心から、急に動的な政治の渦の中心となりました。元治元年(1864)の蛤御門の戦火は、市中の3分の1を焼失する「どンドン焼」の大火となりましたが、やがて「御一新」を迎え、京都は新しい政治情勢の下で政治的中心になるとの期待に一時急激な賑わいを見せたものです。しかし、明治2年(1869)皇居東遷の結果、京都の町は急に灯の消えたような状態になりました。

京都では、「日ニ衰微ニ趣ノ地」になるのを「挽回繁盛ナラシムル」ために明治4年(1871)には河原町御池のあたりに勸業場を設けて新しい産業の振興をはかり、舎密局では、レモネード、ラムネ、ビールや石けんなどを製造し、オランダ人化学者を招いて、理化学の研修を行い、また、養蚕場、製糸場、製紙場も出来ました。また、度々博覧会も催され大きな気球も揚りました。「文明開化」の大きな波が押し寄せたのです。

明治14年(1881)に北垣国道(1836~1916)が知事に着任しました。この状態を見て、「小刀細工の西洋の翻訳の産業政策では危ない、百年の計をもってやらねばならない」と呼び掛けて、明治15年(1882)にまず琵琶湖疏水計画の策定に取りかかりました。琵琶湖の豊富な水を水路で京都へ導き、多くの水車を回して工業を興し、また、大阪湾へ通ずる運輸を便利にすることを計画したのです。優れた測量技師 嶋田道生に、琵琶湖から京都までの地形の精細な測量を依頼しました。この嶋田道生の測量技術がこの大プロジェクトの基礎になりました。

丁度その頃、田辺朔郎(1861~1944)は工部大学校の学生でした。工部大学校は、明治6年(1873)に開校した工学寮からはじまり、明治10年(1877)に工部大学校と改称した学校で、若いイギリス人教師 ダイアー (Henry Dyer) の方針で理論学習と実地教育とを結合した高度の工学教育を行っていました。6年制で特に最後の2年間は実地教育に重点を置いて学生は具体的な構想についての卒業論文を書いて卒業試験を受けることになっていました[「東京大学百年史 通史一」東京大学、昭和59年(1984)]。明治14年(1881)、田辺朔郎は卒業論文のテーマとして、琵琶湖疏水計画を選び実地踏査と測量にあたり、「琵琶湖疏水工事の計画」という卒業論文を完成しました。当時のことを彼は「自分は工部大学校の生徒として、学術研究のため東海道ならびに京都、大阪へ出張を命ぜられ、もちろん東海道線などは未開通の時代とて、草鞋がけにて約十日を要して京都へ来た。これが京都を訪れた最初である。京都では、たまたま疏水事業が計画されていたので、自分も

一学徒として独自の立場からその計画を行ってみることとし、大津京都間の疏水線路を踏査し、また種々の調査を行った上、これを主題として卒業論文を認めることとした。」と語っています。卒業証書には「工部大学校ニ於テ土木学ヲ修メ定規ノ如ク其業ヲ卒ヘ試験高点ヲ得テ第一等ノ科第二ニ登ル乃チ授クルニ工学士ノ位ヲ以テス」とあります〔西川正治編「田辺朔郎博士六十年史」大正13年(1924)〕。後に、田辺朔郎は琵琶湖疏水についての著書のはじめに、「試みに比叡山の絶頂 四明嶽に登って見るとこの地方全体の地形がよく了解される、即ち東山の連山は蜿蜒南方に走っているがその形極めて低平で大文字山如意ヶ嶽なども脚下の一小丘に過ぎない、その東西の両側は近江盆地と京都平野とが広く展開しておいて連山は僅かにこの二大平野の境界を画している土手のようにしか見えないのである。従って古来この山に登って此の形勢を大観したものの中にはどうかしてあの豊富な湖水の水を京都に引く事が出来はしまいかと想像をなしたものも決して少なくはなかったであろう。結局天然の地形が専門的知識を俟たないで誰人にも水利の可能を悟らしめるやうな暗示を黙々の裡に与へて居るのである。」と書いています〔「京都都市計画第一編 琵琶湖疏水誌」大正9年(1920)〕。この文章を読むと私には、彼が最初の実地踏査の時の感激を思いおこしているように感じられます。その時、彼は自ら学習した基礎的知識をもって、この夢を実現するのだと若い胸中に期する所があったのでしょう。

北垣知事が工部大学校の校長 大島圭介に、琵琶湖疏水計画の相談に行った時、大島校長は彼に田辺朔郎を紹介し推薦しました。時に田辺朔郎21歳、北垣知事は46歳でした。やがて、北垣知事は、かねて測量調査に当たっていた嶋田道生と田辺朔郎にこの大プロジェクトの推進を任す事にしました。その計画は、琵琶湖の大津三保崎から三井寺の下までを掘割とし、長等山をトンネルで貫き、山科の山の縁に沿って運河を通して、日ノ岡山を再びトンネルで通して京都蹴上まで出るものでした。蹴上から夷川を鴨川へ通じる本線と、一方蹴上から北へ向い東山から京都の北を通り堀川に注ぐ支線は、京都に水路のネットワークを形成するものでした。しかし、これが実施に移されるまでには、この青年の理想と政治社会の現実の中には大きな開きがありました。田辺朔郎は著書の中に「その起工について一言して置きたい事がある、凡そ一新事業を創出するには、少なからざる反対が起こるのは世の常であるが、此の疏水工事では中央政府の中にも賛否があり、隣府県に反対がありこれに政治上のコンガラガリもあり……」と書いています。非常に几帳面な文章で書かれた著書の中にこの「コンガラガリ」だけはカタカナで書いてあるのが目立ち、複雑な事情を物語っているように思えます。

工事に着手したのは、明治18年(1885)6月2日であります。その年に近畿に大洪水があり、大阪の大川の木橋は殆ど流れて疏水工事を中止すべきであるという運動が起りました。技術面でも、治水、治山の専門のお雇い外国人であったオランダ人技師のヨハネス・デ・レイケ(Johannis de Rijke)はこの大計画を批判して、この計画には長大トンネルの掘削が必要であり「その地質たるや大約皆岩石にして之を掘削するは為し得べからざるにはあらざれども工費多額を要し容易の業にあらず、その他水路中には水門水堰などを設置すべきを要し、経済上より論ずる時は余は之を完全無欠の策と云いがたきものの如し」と書いています。ただ、この計画にある等高線を以って精細に作成された地図については「測量者は実地製図のために大いに名誉を得るなり…」と地図だけ

は見事であると云っているのです。

田辺朔郎は当時を回顧して「当時お雇い外国人の勢力はすばらしく、其の言論には政府も重きを置き、書生上りの著者がこれを説破するのは容易なことではなかったが、然し、誠意は岩をも透すと云うのであろう。」と書いています。若い技術者の理想に燃えた夢、そして、学習した基礎に立った確固たる信念、これが困難な現実を勝って、この工事は続けられたのであります。

起工したものの、ダイナマイトもセメントも殆ど輸入しなければならず、しかもその量は僅かなものでセメントは“葉”のように大事に使われました。煉瓦も当時、堺で年産200万枚程度しか出来なかったものでこれでは間に合わず、山科に1,000万枚年産出来る煉瓦工場を建設しました。田辺朔郎も現場ではじめは“青二才”と嘲笑されることが多かったようです。しかし彼は、夜は現場で働く人々に講義をして人材の養成に当り、昼は熱意を持って率先垂範奮闘しました。そのうちに坑夫たちもいつしか彼を尊敬するようになったのです。そうして掘られた長大な長等山トンネルは2,436mで当時の最長記録を一挙に1,100mも更新するもので、随分新しい工法も使いました。大変苦心をしましたが、やっとトンネルの目鼻が付いた頃に、京都の西陣で綴れ錦を織っている川島甚兵衛と云う人がアメリカへ行き、マサチューセッツ州のホリヨークの都市計画に水力発電を組み入れている事を聞いて、水力発電の有望なことを伝えました。田辺朔郎は、琵琶湖疏水の水力エネルギーを水力発電に用いる事の優位性を見抜いて、トンネル工事の完成近く、急ぎょ明治21年(1888)10月アメリカへ視察に行きました。当時アメリカでもまだ150馬力の小さな水力発電が稼働したばかりでした。彼は帰国後すぐ琵琶湖の水面が京都の市街地よりも40m高いことを用いて、その頃世界で最新、最大の2,000馬力の水力発電施設を作るように計画を変更しました。鹿ヶ谷の階段的な運河と水車工場の建設をやめて、船はインクライン(傾斜鉄道)によって南禅寺の横に降ろし、そこから夷川を鴨川の方に通じる運河を作り、水は鉄管で水力発電所へ送ることにしました〔「琵琶湖疏水及水力使用事業」,京都市電気局 昭和15年(1940)]。

これで大きな変更も無事済んで、やっと工事が終りかけた時、明治22年(1889)に今度は近畿でコレラが大流行いたしました。遂に着工以来4年10か月で工事を完成して、水を通して完成を祝ったのが明治23年(1890)4月9日でした。本州一四国連絡橋の児島一坂出ルートの完成の丁度98年前の事であります。

京都の町は、今丁度桜が奇麗です。ここから銀閣寺へ、そして、疏水に沿って哲学の道と云われている桜並木を永観堂、南禅寺へと散策しますとそこに自然と人間との調和が100年の歴史を経てしっかりと作られているのが感じられると思います。岡崎公園の京都会館のあたりでは、桜と交互に植えられた柳が美しい緑の新芽をつけてゆたかな疏水の水面に垂れています。田辺朔郎は後に、「あの辺りは初め幅20間(約36m)にしようという考えであったのです、兎に角、京都という所は水がない、だからあそこを20間にすれば相当京都にいい水の面が得られる、それをやろうと思ったのですが、そんな贅沢なものは要らんというので10間にしたのです」と語っています〔「疏水回顧座談会速記録」京都市電気局,昭和14年(1939)]。

田辺朔郎博士は明治30年(1897)京都帝国大学が設置されて最初に開設された理工科大学の土木工学教室へ明治33年(1900)に教授として着任、大正12年(1923)の退官まで主として鉄道工学を

講義されました。その間、大正5年(1916)から大正7年(1918)までは工科大学学長(現在の工学部長に当る)の任に就かれました。先生が停年を迎えられる数年前に、ヒマラヤ杉の苗木を教室の中庭に植えられました。そのヒマラヤ杉は、今、大木に成長しております。その根元に「大正元年生レ ヒマラヤ杉」、「田辺朔郎寄附」と刻まれた石柱があります。この石柱は、埋められていたもので、先生はこれを地中にそっと埋めておきたかったのではないかと云われています〔「近代土木技術の黎明期」土木学会、昭和57年(1982)〕。

幕末から明治への文明開化の波の中で、西洋文明に学びつつ我が国古来の文化に若々しい創意が加わって、今日の日本の基礎が築かれてきたのであります。

入学式に当りまして、歴史を顧み、そしてこれから先の日本、これから先の世界、人類の将来のために、大学という学問の府がいかにあるべきかということをしっかりと考えたいと思います。自然と人間との調和、そして人々がよりよく幸せに生きる人間社会の真の成熟のために、今、しっかりとした基盤を築くべき時であると思います。京都大学の自由の伝統の中で諸君一人ひとりが自ら学ぶことを身につけるよう期待します。諸君の輝かしい眼差しを見ながら、私は京都大学の伝統が諸君によってますます生き活きと将来に引き継がれて発展して行くのを感じます。京都大学が世界の中の、人類の歴史の中の学問の府としての意義がここにあると思います。しっかりと学んで下さい。理想を高く、夢を大きくもって自ら学ぶということをしっかりと考えて下さい。



＜大学の動き＞

名誉教授称号授与式

4月6日(水)午前10時から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長あいさつ」があって、午前11時に終了した。称号を授与された方は次の53名である。

(敬称略)

(氏 名) (推薦部局長)

宮 武 義 郎(教 養 部)

川 出 由 己(ウイルス研究所)

吉 川 宗 治(防災研究所)

土 肥 美 夫(教 養 部)

服 部 正 明(文 学 部)

北 丸 竜 三(化学研究所)

本 山 幸 彦(教育学部)

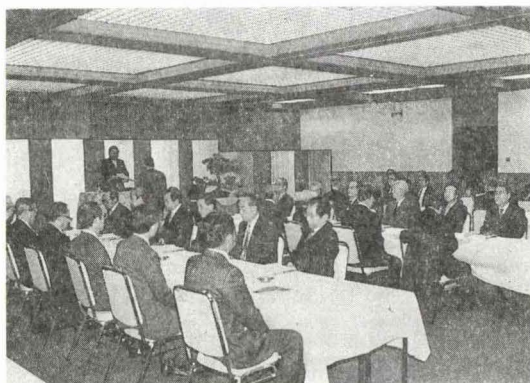
清 水 純 一(文 学 部)

雑 賀 亞 幌(理 学 部)

道 田 信一郎(法 学 部)

中 村 陽 二(工 学 部)

大 野 豊 (ク)



川 上 貢(工 学 部)

岡 村 健二郎(ク)

大 井 龍 夫(化学研究所)

波多野 博 行(理 学 部)

植 田 夏(化学研究所)

中 島 誠(教 養 部)

高 木 久 雄(ク)

坂 井 利 之(工 学 部)

辻 川 郁 二(理 学 部)

皆 川 貞 一(ク)

植 木 邦 和(農 学 部)

樋 口 謹 一(人文科学研究所)

多 田 道太郎 (人文科学研究所)
 稲 垣 博 (化学研究所)
 柳 島 静 江 (教 養 部)
 川 野 豊 (工 学 部)
 國 司 秀 明 (理 学 部)
 西 口 猛 (農 学 部)
 溝 畑 茂 (理 学 部)
 岩 井 和 夫 (農 学 部)
 梶 山 雄 一 (文 学 部)
 西 本 孝 一 (木材研究所)
 石 橋 武 彦 (農 学 部)
 日 沼 頼 夫 (ウイルス研究所)
 半 田 良 一 (農 学 部)
 山 口 昌 哉 (理 学 部)
 大 石 純 (工 学 部)

宇 尾 光 治 (ヘリオトロン核融合研究センター)
 加 治 有 恒 (理 学 部)
 高 木 俊 宜 (工 学 部)
 高 松 武 一 郎 ()
 寺 本 英 (理 学 部)
 松 下 雪 郎 (食糧科学研究所)
 倉 田 道 夫 (化学研究所)
 小 門 純 一 (工 学 部)
 井 田 一 夫 (医用高分子研究センター)
 市 村 眞 一 (東南アジア研究センター)
 奥 田 節 夫 (防災研究所)
 安 藤 昭 一 (教 養 部)
 浮 田 典 良 ()
 並 河 澄 (農 学 部)

昭和63年度入学者選抜学力試験の結果

昭和63年度入学者選抜学力試験合格者の入学手続が3月31日(木)に完了した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学手続者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受 験 者 数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(J) 入学手 続者数
文 学 部	220人	1,186人	5.4	699人	686人	3.1	13人	1.9	250人	232人
A日程	20	586	29.3	100	92	4.6	8	8.0		
B日程	200	600	3.0	599	594	3.0	5	0.8		
教 育 学 部	60	248	4.1	211	207	3.5	4	1.9	84	66
A日程	20	119	6.0	82	78	3.9	4	4.9		
B日程	40	129	3.2	129	129	3.2	0	0.0		
法 学 部	400	983	2.5	974	957	2.4	17	1.7	436	426
経 済 学 部	240	1,225	5.1	1,123	1,101	4.6	22	2.0	385	279
A日程	50	360	7.2	283	277	5.5	6	2.1	171	
B日程	190	865	4.6	840	824	4.3	16	1.9	214	
理 学 部	306	2,150	7.0	2,063	2,017	6.6	46	2.2	585	306
医 学 部	120	531	4.4	531	508	4.2	23	4.3	193	124
薬 学 部	80	283	3.5	283	278	3.5	5	1.8	135	95
工 学 部	1,030	3,778	3.7	3,778	3,737	3.6	41	1.1	1,584	1,078
農 学 部	325	1,438	4.4	1,216	1,201	3.7	15	1.2	454	336
計	2,781	11,822	4.3	10,878	10,692	3.8	186	1.7	4,106	2,942

(注) 1. 受験者数、欠席者数及び欠席率は最終教科のものである。

2. 法学部と経済学部の合格者数には、外国学校出身者のための選考試験の15名と7名とがそれぞれ含まれ、また、両学部の入学手続者数には、両選考試験の13名と3名とがそれぞれ含まれている。

昭和63年度学部入学式

4月11日（月）午前10時10分から、昭和63年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」（前掲）があり、午前10時45分終了した。

今年度の新入生数は、外国人留学生18名を含め、次のとおりである。

文学部232名、教育学部66名、法学部428名、経済学部286名、理学部306名、医学部124名、薬学部96名、工学部1,084名、農学部338名、計2,960名。そのほか、第3年次に30名の編入者があった。

昭和63年度大学院入学式

4月11日（月）午後3時から、昭和63年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館で挙行された。

入学式は学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」があり、午後3時40分終了した。

なお、今年度の大学院入学及び進学状況は次のとおりである。

研 究 科	修士課程	博 士 後 期 課 程	
		入 学	進 学
文学研究科	67 名	11 名	52 名
教育学研究科	17	0	10
法学研究科	15	2	11
経済学研究科	22	2	16
理学研究科	169	11	95
医学研究科		128*	
薬学研究科	36	0	11
工学研究科	598	16	58
農学研究科	150	16	65
計	1,074	186	318

注 *は博士課程

昭和63年度医療技術短期大学部入学式

医療技術短期大学部では、昭和63年度入学式を4月7日（木）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓臨席のもとに挙行した。式典は学長式辞、来賓祝辞があって、午前10時50分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科40名、理学療法学科20名、作業療法学科20名及び専攻科助産学特別専攻20名の計180名である。

（医療技術短期大学部）

部 局 長 の 交 替 等

農学部附属演習林長

堤 利夫 農学部附属演習林長の任期満了に伴い、その後任として武居有恒農学部教授（砂防学講座担当）が4月2日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

体育指導センター所長

岩井信之教養部教授（保健体育担当）が4月2日体育指導センター所長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

アフリカ地域研究センター長

伊谷純一郎アフリカ地域研究センター教授（湿润帯生態系研究部門担当）が4月5日アフリカ地域研究センター長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

遺伝子実験施設長

遺伝子実験施設の新設に伴い、同施設長に本庶佑医学部教授（医化学講座担当）が4月8日任命された。任期は昭和65年4月7日までである。

昭和62年度京都大学創立七十周年記念後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委員会で決定した昭和62年度助成金交付者は、第1種（海外派遣研究員）22名、第2種（海外からの招へい学者）11名、第6種 11名で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査、研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当、宿泊料）を交付するもので、派遣区分は、6か月、3か月、1か月、若手研究者（概ね1年）がある。

派遣区分	所 属 部 局	職 名	氏 名	派 遣 国	研 究 題 目
6か月	医学部附属病院	助 手	笠 井 隆 一	アメリカ合衆国	骨粗鬆症の基礎的・臨床的研究
	工 学 部	助教授	酒 井 英 昭	アメリカ合衆国	最大エントロピースペクトル解析法の信頼区間に関する研究
	結核胸部疾患研究所	助 手	網 谷 良 一	連合王国	慢性下気道感染症における気道線毛の病因論的意義、線毛運動抑制物質、線毛運動促進物質の検索
3か月	文 学 部	講 師	吉 田 和 彦	アメリカ合衆国	ヒットライト語の動詞形態論とその起源の研究
	農 学 部	助教授	古 澤 巖	カナダ	植物の RNA ウイルス増殖に関する研究
	教 養 部	教 授	山 崎 和 夫	連合王国, スイス, ドイツ連邦共和国, オーストリア	理論物理学に関する研究及び量子力学誕生にまつわる科学史的資料収集
	基礎物理学研究所	助 手	鈴 木 敏 男	アメリカ合衆国	原子核の相対論的応答関数についての研究
1か月	教 育 学 部	教 授	本 山 幸 彦	連合王国	イギリスにおける教育政策形成過程の歴史的研究
	理 学 部	教 授	寺 本 英	イタリア	数理生物学国際研究集会出席並びに研究調査
	医学部附属病院	助 手	森 安 史 典	アメリカ合衆国	門脈圧亢進症に関するエール大学との共同研究調査
	薬 学 部	助教授	宮 嶋 孝一郎	イタリア, オーストリア, ドイツ連邦共和国, フランス, 連合王国	糖水溶液の物性および糖と生体膜との相互作用に関する研究調査
	工 学 部	助教授	芹 澤 昭 示	連合王国, ユーゴスラビア	気液二相流の乱流構造及び界面構造に関する研究
	農 学 部	教 授	西 口 猛	イタリア, スイス, ドイツ連邦共和国, オランダ	農村整備及び農村排水処理学に関する研究
	教 養 部	教 授	土 肥 美 夫	アメリカ合衆国, フランス, ドイツ連邦共和国	クレー, カンディンスキーと1920年代美術の調査
	原子炉実験所	助 手	松 山 奉 史	ドイツ連邦共和国, 連合王国	ジアセチレンの γ 線重合と相転移に関する研究
	霊長類研究所	助 手	中 村 伸	ベルギー, ノルウェー	霊長類の血液凝固因子の発現および機能に関する研究
	保健センター	講 師	大 東 祥 孝	フランス, スイス	「過食症」の本態と治療に関する研究
	超高層電波研究センター	助教授	松 本 紘	フランス	ISSS-3（第3回宇宙空間計算機シミュレーション国際学校）において招待講演、実習指導及び研究調査
	医療技術短期大学部	教 授	藤 原 哲 司	イタリア, 連合王国	第8回国際筋電図学会出席及びてんかん患者の脊髄伝導の障害に関する研究調査
若手研究者	経 済 学 部	助教授	池 尾 和 人	アメリカ合衆国	変革過程にある金融システムの日米比較研究
	工 学 部	助 手	浅 野 敏 之	デンマーク, オランダ, ノルウェー, スペイン	波動場及び波と流れの共存場における底面近傍の水理特性に関する研究
	防災研究所	助 手	八 嶋 厚	アメリカ合衆国	地盤災害に関する研究

2. 第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義、研究指導等を依頼してその分野の研究発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、招へい期間は原則として1～3か月（一般）及び1年以内（若手研究者）である。

区 分	受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
一 般	教 育 学 部	David Miller	アメリカ合衆国・シラキ ユース大学教授	人格変容の過程と宗教性
	法 学 部	Klaus J. Hopt	ドイツ連邦共和国・ミュ ンヘン大学教授	日本とドイツおよびヨーロッパの会社 法比較研究
	理 学 部	Fritz Luty	アメリカ合衆国・ユタ大 学教授	レーザー光物性研究
	医 学 部	Arthur D. Strosberg	フランス・パリ第七大学 教授	ホルモン受容体の免疫学的並びに生化 学的研究
	工 学 部	John Michael Schurr	アメリカ合衆国・ワシ ントン州立大学教授	DNA およびモデル化合物の構造とダ イナミックス
	農 学 部	Harold D. Johnson	アメリカ合衆国・ミズー リ大学教授	家畜環境生理学に関する研究
	教 養 部	Michel Weber	フランス・国立科学セン ター研究員	確率過程の研究
	食糧科学研究所	Jean Claude Cheftel	フランス・ラングドック 理工科大学教授	食品タンパク質の加工特性（化学的変 化、栄養性の変化）及び食品素材のエ クストルージョンクッキングの基礎と 応用
	霊長類研究所	Klaus J. Müller	ドイツ連邦共和国・ボン ン大学教授	錐菌類、貝形類など微化石の系統・進 化・分類学的研究
若 手 研究者	医 学 部	Bouderlique J. Yann	フランス・リヨン大学研 究助手	現象学的精神病理学とソンディの運命 分析理論の総合
	原子炉実験所	Wilhelm Ehrlich	ドイツ連邦共和国・ベル リン自由大学研究助手	哺乳動物細胞の代謝に及ぼす環境要因 の作用

3. 第6種

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所 属・職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
総 長	西 島 安 則	昭和 62. 5. 29～62. 6. 5	アメリカ合衆国における高等教育・研究機関の実情調査
学生部入試課長	大 内 剛	〃	アメリカ合衆国の大学における入試制度等の実情調査
学生部学生課長	神 岡 十三雄	62. 10. 8～62. 10. 18	連合王国の高等教育・研究機関における教育の国際交流 等の実状調査
事 務 局 長	石 井 久 夫	62. 10. 27～62. 11. 7	東南アジア諸国における高等教育・研究機関の研究体制 ・行財政制度の実状調査、国際学術交流のための拠点 大学との連絡及び東南アジア研究センター現地連絡事務 所の管理状況等の視察
東南アジア研究 センター所長・ 教授	石 井 米 雄	62. 10. 27～62. 11. 4	東南アジア諸国における高等教育・研究機関の研究体制 及び学術交流の実状調査
庶務部国際交流 課第二渉外掛長	貝 塚 唯 生	62. 10. 27～62. 11. 7	東南アジア諸国の学術研究機関における国際学術交流関 係業務の管理・運営状況等の実状調査
化学研究所教授	稲 垣 博	63. 1. 20～63. 1. 27	韓国の高等教育・研究機関における学術交流、特に研究 者・留学生受入れに伴う学術上の効果等の実情調査
人文科学研究所 助 教 授	横 山 俊 夫	〃	韓国の高等教育・研究機関における学術交流、特に研究 者・留学生受入れに伴う学術上の効果等の実情調査
庶務部国際交流 課第三渉外掛長	藤 原 郁 良	〃	韓国の高等教育・研究機関における学術交流関係業務の 管理・運営状況等の実状調査
庶務部庶務課 庶 務 掛 長	廣 垣 宜 次	63. 1. 24～63. 2. 2	東南アジア諸国の高等教育・研究機関における管理・運 営組織及び事務体制の状況等の実状調査
学生部学生課 文 部 事 務 官	篠 原 初 江	63. 3. 29～63. 4. 10	欧州諸国の高等教育・研究機関における国際交流の実状 並びに留学生の受入れ体制等の状況調査

<紹介>

化学研究所

材料物性基礎研究部門

材料物性基礎研究部門 (Laboratory of Fundamental Material Properties) は、高分子構造研究部門及び繊維化学研究部門の転換により、昭和62年5月21日に大部門として設けられたものであり、高分子及び関連材料の構造・物性・機能を分子論的な立場から基礎的かつ総合的に研究することを目的としている。当部門は、四つの研究部門から成っており、第一研究部門は溶融体物性研究領域、第二研究部門は固体物性研究領域、第三研究部門は分子運動研究領域、第四は客員研究部門で複合体物性研究領域を扱う。定員は、教授4（内容員1）、助教授3、助手3、教務職員1である。以下に、各研究部門の具体的な研究内容を紹介する。

第一研究部門では、高分子溶融体の性質及び溶融体における分子の運動について研究している。いろいろな変形条件下における力学的性質（粘弾性）や光学的性質（流動複屈折）を測定し、高分

子の伸長や配向との関係を調べている。また、動的光散乱や強制レーリー散乱の方法を用いて、高分子の運動挙動を調べている。これらの基礎研究の成果から、高分子加工過程の改善、高分子及び複合材料の機能向上など、応用面に関する基礎的知見を得ている。さらに、これらの均一高分子系以外にも、微視的に相分離したブロック共重合体高分子ゲル、炭素繊維原料のピッチなどのように、分子間相互作用が強くて、高次の構造を形成する系についても同様な研究を行い、高分子関連材料の新しい機能を引き出すことを目指している。

第二研究部門では、高分子固体の静的構造及び動的構造を中性子散乱法、X線散乱法などを用いて研究し、それらの高分子材料物性との関連を追求している。中性子散乱法では、重水素化ラベル法や図1の特徴などを利用して、ゴム、高分子ガラス、半結晶性高分子固体などの材料中の分子運動（低振動数領域の振動モード及び局所揺動運動）を研究し、ゴムの架橋効果、ガラスの力学的性質、非晶固体の比熱の異常など実用的な性質との関連の解明を目指している。X線散乱研究では、半結晶性高分子固体の高次構造と性能の関係、高分子結晶の異常回折現象の解明とその応用、非晶固体の構造と密度ゆらぎの関係、さらには、高分子電解質溶液及び固体の構造等の研究を遂行あるいは計画している。

第三研究部門では、高分子材料の物性と、材料中において種々の広がりにつながる分子運動との関係を明らかにすることを目的として、研究を進めている。いろいろな大きさの低分子の高分子材料への輸送・溶解挙動を調べて、高分子の運動についてのみならず、プローブ低分子の大きさに対応する領域の微細構造についての知見を得ている。またこれら挙動の測定結果に基づいて、高効率分離用高分子膜の開発に必須の、低分子選択透過機構の解明を進めている（図2）。固体高分解能 ^{13}C NMR法及び ^2H NMR法を用いて、 10^2 — 10^{12} Hzの周波数域にわたって、結晶性高分子固体中の非晶域における分子運動の解明、ガラス状態における局所的分子運動の検討を行っている。さらに、低分子—高分子系におけるミク

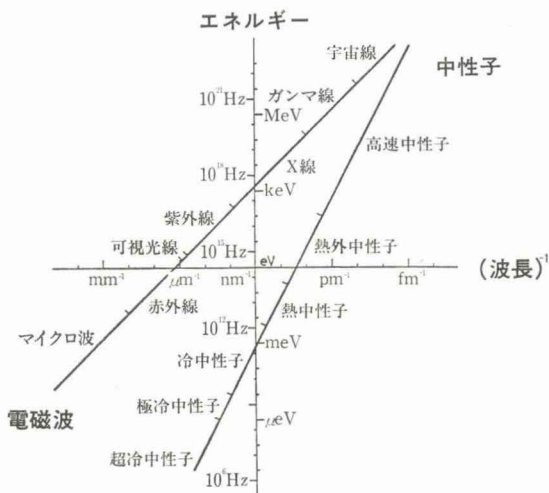


図1 中性子と電磁波に対する波長とエネルギーの関係

中性子のエネルギーと波長の関係は、分子・原子の世界の運動エネルギーと距離の相関関係に、電磁波よりはるかによく対応している。そのため、中性子（熱中性子〜超冷中性子）はミクロの世界を調べる非常によいプローブ（探針）となる。

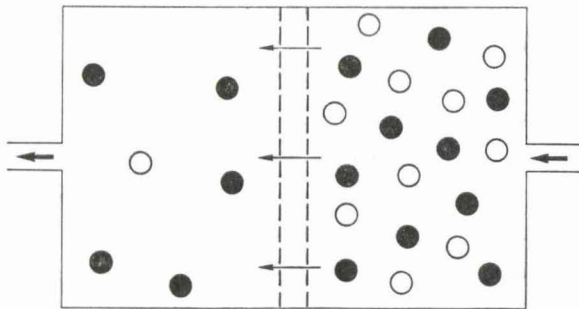


図2 選択透過性高分子膜、透過性の違いで、2種類の気体を分離することができる。

ロ相分離構造発現の過程を、時間分割光散乱測定により調べると共に、ゾル・ゲル転移及びミセル形成過程に関与する分子運動機構の解明を試みている。

客員研究部門では、高分子と金属・セラミックスとの複合材料の構造と物性、分子運動と物性との関係を研究して、高強度複合材料の新しい成形加工法の開発、高性能の衝撃エネルギー吸収材料の開発などを目指している。

(化学研究所)

保健コーナー

夢の仕事と精神保健

人の精神生活にとって、夢は欠かせない役割を担っている。それは、内的世界と外的世界を照合することである。内的な世界を旧来の心の体制、外的な世界を新しい体験と言い換えてもよい。古い体制が新しい体験に馴染むためには何回ものリハーサルが必要である。それが夢なのである。

人は目覚めている間にたくさんの体験をする。外的な知覚も、内的な感情も含めて、予期しないことが、次から次へと起こってくる。これらの新しい体験に秩序が生じて、今までにたくわえられてきた経験の体系、つまり性格と折り合いがつくようになるというのは、考えてみれば不思議なことである。

意識的な操作でできることは限られている。われわれが否応なく体験するさまざまな出来事の中には、われわれに納得できないようなものも多い。どんなにうまく理屈をつけても、どんなに偉い人の道德観を借りてきても、どうしても処理できない理不尽なことが、心の中に残ってしまう。

心の中に残ったこういった滓のようなものを処理するためには、それが大切なことであればあるほど、単なる気分転換や「発散」ではうまくゆかない。それは一種の論理的・科学的思考にゆだねられる必要がある。

実はわれわれは、幼い時にすでに一度このような難局にぶつかって、それを乗り越えて来ている。たとえば、人間はどこから来るのか、といった問いがそれである。幼い者としてのわれわれの答え方の一つは、母親が食事をたくさん食べることによって、排便をするのと同じように子供が出来たのだという考えである。

この回答はむろん間違っているが、採点する人があるわけではないから、この答に自分で納得してしまうということが起こる。大人になって、別の答が正しいということが分かっても、心では、知らず知らずのうちに、前の答の方が正しいと思ってしまう。なぜなら、その答が、幼い時の難題を兎にも角にも解決してくれたからである。

大人になってから自分にとってむずかしい問題が起こってきたとき、人はその解決の糸口を、幼児期の経験の中に見出そうと思う。それは意識的に行われるのではない。幼児期にまで人を連れ戻すのは夢の仕事である。人間はどこから来るのかということばかりでなく、男女の別はなぜあるか、世界はどうして作られたか、など、子供が直面している謎は哲学や物理学の根本問題に相当する。これを子供は一応解いてから大きくなってゆく。この解決の経験を、生かさなideおく理由はない。われわれは夢に導かれて、子供時代の知恵を借りにゆくのである。

子供時代の問題解決法の中へと現代の難題を持ち込んだら、今度はそれをどうするか。くり返

し、いろいろなやり方で解いてみるのである。そして最も自分に納得がゆくやり方を見つけ出そうとする。

先日来日した人類学者レヴィニストロース氏は、ある神話が、一つの課題を反復していることを発見した。「人間は土から生まれた」という認識と、有性生殖という認識との間のギャップという課題である。その神話は、この二つの認識の対立を、いろいろなエピソードの中で繰り返して、良い解決法を探し求めているのである。

夢も同じ反復の構造を持つ。生まれてこの方培ってきた認識法と、新しい分類困難な経験との間のギャップを埋めるために、夢は繰り返し課題を反復する。その課題がいかにも苦しくても夢はそれをやめない。だから、一晩の夢をよく調べてみる

と、いくつかの場面が、全く同じ構造を持っていることは珍しくない。一週間、いや一年間の夢でさえ、同じ構造に規定されていることがある。

脳波研究によれば、夢を集中的に見ているのはREM 睡眠という時期で、一晩に数度あり、脳波計に独特の波型が出る。もしこの REM 睡眠を人工的に奪うと、精神的に変調を来すことが知られている。

睡眠が、そして夢が（たとえ覚えていなくても）、精神的健康の維持のために不可欠なのはこういう事情による。夢によって、人は幼児期からの認識や感情の発達を辿りなおし、そこから問題解決のための啓示を汲み取る。「果報は寝て待て」という諺は、この観点から見て実によい忠告というべきである。（保健診療所 新宮一成）

計 報

桑原 武夫（本学名誉教授）

4月10日逝去、83歳。昭和3年本学文学部卒業。23年本学人文科学研究所教授就任、43年退官。その間評議員（32年9月～同年10月）、人文科学研究所長（34年～38年）

を歴任。49年勲二等瑞宝章、52年日本芸術院会員、54年文化功労者、62年文化勲章（広報 No. 341 参照）。専門はフランス文学。

日 誌

（1988年3月1日～3月31日）

2月29日～3月1日

入学者選抜学力試験（第2次学力検査）A日程試験

4日～5日

医療技術短期大学部入学者選抜試験

5日～6日

入学者選抜学力試験（第2次学力検査）B日程試験

8日 評議会

12日 ポーランド人民共和国 Warszawa 大学 Wiestaw Roman Kotanski 教授来学、総長と懇談

ドイツ連邦共和国 Heidelberg 大学 Wolfgang Schamoni 教授来学、総長と懇談

14日 連合王国 Sussex 大学 John N. Murrell 前副学長ほか1名来学、総長及び関係教官と懇談

17日 医療技術短期大学部卒業式、同専攻科修了式

23日 修士学位授与式

博士学位授与式

24日 卒業式

ドイツ連邦共和国 München 大学 Wulf Steinmann 学長来学、総長及び関係教官と懇談

25日 国際交流委員会

国際交流会館委員会

安全委員会

附属図書館商議会

先進国科学技術関係者一行38名来学、関係教官と懇談及び総長主催レセプション

28日 ドイツ連邦共和国 Berlin 自由大学 J. Fischer 教授来学、総長及び関係教官と懇談

